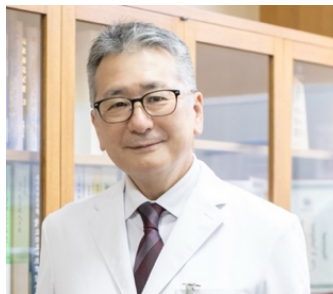


2025年度 交流助成 成果報告（日本招聘）



2025年11月5日
所属：自治医科大学脳神経外科学講座
氏名：川合謙介
会議等名称：ライトキューブ宇都宮
開催地：栃木県、宇都宮市
時期：2025年10月2-4日

1) はじめに（招聘の概要）

日本てんかん学会は、てんかんの病態解明と治療の進歩を目指し、基礎から臨床にわたる幅広い分野の専門家が一堂に会して最新の知見を共有する学術集会です。第58回学術集会では、「変革の時代におけるてんかん学とてんかん医療」をテーマとして掲げ、てんかん外科、脳神経科学、AI 医療応用など多岐にわたる分野での先端的研究と臨床応用が活発に議論されました。本学術集会では、このテーマにふさわしい国際的招聘講演として、インド・全インド医科大学(All India Institute of Medical Sciences, AIIMS)より P. Sarat Chandra 教授、および米国・ウェイン州立大学(Wayne State University)より 浅野英司教授 を招聘いたしました。

2) 被招聘者の紹介

P. Sarat Chandra 教授は、インド・全インド医科大学の脳神経外科教授で、てんかん外科や頭蓋頸椎接合部異常、脊椎疾患、低侵襲脳神経外科の分野で世界的に著名です。これまでに3,500件以上のてんかん外科手術の経験を有しており、内視鏡下半球離断術やロボット支援下熱凝固療法など、多くの革新的な手術法を考案してこられました。原著論文は590本以上、特許は9件、国際講演は500回以上の実績があります。

浅野英司教授は、小児科および神経内科の教授であり、機能的脳マッピングの分野における第一人者です。2004年より米国ミシガン州のウェイン州立大学で教員を務めるとともに、ミシガン小児病院にて神経診断部門のディレクターを担当し、新生児から成人に至るまで500名以上の患者に対して、侵襲的モニタリングを含むてんかんの術前評価において中心的な役割を果たしてこられました。また、2008年から2017年の間に、神経学および神経科学分野の学術誌において、脳内記録・刺激技術に関する論文を第一著者または責任著者として多数の論文を発表されています。さらに、2004年以降20年以上にわたり、米国国立衛生研究所(NIH)の助成を継続的に受けて研究活動を続けていらっしゃいます。

3) 会議または集会の概要

第58回日本てんかん学会学術集会は、2025年10月2日（木）から4日（土）の3日間、栃木県宇都宮市のライトキューブ宇都宮において開催されました。本学術集会のテーマは「変革の時代におけるてんかん学とてんかん医療」であり、医療制度や研究体制の変化が加速する現代において、てんかん学が果たすべき新たな役割と今後の方向性を議論する場として企画されました。特別講演、教育講演、シンポジウム、特別企画、一般演題など多彩なプログラムが構成され、合計126セッション、488演題、参加人数1630名という大規模な学術集会となりました。

4) 会議の研究テーマとその討論内容

会期中は、てんかん学の基礎研究から臨床応用、社会的支援まで幅広い分野の専門家による活発な発表と討議が行われました。特別講演では、国際てんかん連盟（ILAE）における発作定義の見直しや、てんかん遺伝子治療、AI医療応用など、国際的・学際的な視点からの最先端研究が紹介されました。また、アジア諸国との国際連携やてんかん外科の技術革新を扱った特別企画も実施され、臨床と研究の融合を目指した議論が展開されました。本学術集会は、変革の時代における日本でのてんかん学の課題と可能性を再確認し、国際的視野に立った研究と診療の発展を促進する有意義な学術の交流の場となりました。

P. Sarat Chandra 教授

Chandra 教授はインドおよびアジア地域におけるてんかん外科の発展と技術革新について報告されました。インドでは約 1,000 万人のてんかん患者のうち 20%が薬剤抵抗性であるにもかかわらず、外科治療を行える施設は 6 か所に限られています。演者らは 1996 年に設立された全インド医科大学のてんかん外科センターを拠点に、低コストで持続可能な外科技術の開発に取り組んでおり、MEG、SEEG、ロボット支援下熱凝固療法などを活用して治療の安全性と効率を高めています。小児例では、外科治療がてんかん性脳症を防ぐ早期治療戦略として有効であることが示され、術前の画像解析や神経ネットワーク同定技術の進歩が重要であると述べられました。討論では、途上国における技術普及や人材育成、国際的な共同研究の推進が今後の課題として挙げられました。



浅野英司教授

浅野教授は、教育講演にて約 30 年間にわたって取り組んできたてんかん研究の経験をもとに、研究を成功に導くための要点を語っていただきました。若手研究者から寄せられる「どのようにして研究の方向性を見いだしたのか」という問いに対し、自身の研究過程やキャリアパスを振り返りながら、成果を上げるための「2つの秘訣」と、避けるべき「1つの落とし穴」を具体的に紹介されました。その中で強調されたのは、他の研究者とのコラボレーションの重要性であり、本学会においても皮質-皮質間および視床-皮質間誘発電位（CCEP・TCEP）を用いた発作起始部の同定に関する研究を共同研究者と共に報告されていました。



5) 招聘した成果

Chandra 教授は 26 年以上にわたって、低コストで持続可能な外科治療技術の開発に取り組まれており、講演では、MEG や SEEG、ロボット支援下熱凝固療法などを活用した革新的手法の導入と、それらを地域医療に応用する取り組みが紹介されました。また、小児てんかん外科に関する発表では、従来「最終手段」とされてきた外科治療が、発達を守るための早期介入として再評価されるべきであると提言されました。討論では、低・中所得国における人材育成と外科治療の普及、そしてアジア諸国間の協力体制の構築が強調され、地域格差を超えて実現可能な医療モデルの重要性を示すとともに、国際的な共同研究と技術交流を促進する大きな契機となりました。

浅野教授は米国での長年の研究経験に基づき、てんかん研究の発展と若手医師の育成に関する極めて示唆に富む講演を行っていただきました。教育講演では長年の研究の歩みを振り返りながら、研究を成功に導くための具体的な姿勢と方法論について述べられ、若手研究者・臨床医に対して、臨床と研究を両立させる上での明確な指針を示されました。特に、異分野との連携や国際共同研究の重要性、そして長期的視点に立った課題設定の必要性についてのメッセージは、次世代研究者に強い印象を与えました。

6) その他

両教授の招聘をご支援いただきました公益財団法人 中谷医工計測技術振興財団に心より感謝申し上げます。本財団のご支援により、てんかん医療分野における国際的な学術交流と情報交換が実現し、日本と海外の研究者が最新の知見を共有する貴重な機会となりました。本招聘を通じて築かれた国際的ネットワークは、今後のてんかん学の発展に大きく寄与するものと確信しております。